

【氷室】 ひむろ

氷室とは氷を貯蔵するための穴を設けた室、壁や屋根を含めた設備の一切をいいます。冬の間に湖や池の氷を運び、保冷しておく設備です。当然、夏でも涼しい山中に設けますが、その山の多くは氷室山と呼ばれました。

氷室の最古の記録は『日本書紀』仁徳六十二年にあります。額田大中彦皇子が狩の際に民間の氷室を見つけ、大王に氷を献上するという話です。これを契機に御領の氷室が設けられたと思われま

す。この記録に残る最古の氷室は構造と用途が記されています。それによれば、土を一丈掘り、草でその上を覆い、茅、ススキ(荻)を厚く敷いて氷を採ってその上に置いておく。氷は夏に水や酒に入れて使うのだそうです。

平安時代、宮中御用の氷室は畿内に数箇所あったことがわかっており、氷室山の地名は各地に残されています。『延喜式』の「主水司式」[もいとりのつかさしき]には十箇所の氷室が記され、その中には謡曲『氷室』の舞台となった丹波国桑田郡も含まれています。

謡曲『氷室』は宮増作。亀山院の臣下が氷室山に赴くと氷室守の老人が現れ、夏でも氷が解けないのは大君の徳のためだと語ります。夜になると天女が舞い、氷室の神が現れ氷を守護し都へ送り届けるという話です。

・青葉の木蔭分け過ぎて 雲路の末の程もなく 都に近き丹波路や 氷室山にも着きにけり

謡曲『氷室』より

あるお茶人に「私の故郷では六月になると白い菓子を戴く習慣がありますが、何か意味があるのでしょうか」と尋ねられたことがあります。これは氷室の朔日、あるいは氷室の節句と呼ばれる風習と思われま

す。その方の故郷は小京都といわれる地方都市ですので、応仁の乱以降、京文化が伝わって以来の風習かもしれません。氷室の朔日は陰暦六月一日に行われた宮中年中行事で、氷室から氷を運び出し、宮中にて帝が食する行事です。このとき諸公にも下賜したようです。涼を楽しむと同時に夏に対処する祓の意味がありました。

いつしか民間でも宮中に習い、厄除けの意味を込めて氷の代わりに餅など白い菓子を食するようになったのです。

・青霞原嵐ひまなし氷室より氷積みたる車は行くも 『氷魚』島木赤彦

アララギ派の歌人島木赤彦(明治 9-大正 15)は諏訪の出身。彼の時代はまだ氷室が活躍していたようです。松本清張の小説『天城越え』にも氷室が登場しますね。

電気製氷機・冷蔵庫の出現により氷室の存在理由は終止符を打たれたようです。

しかし現在でも、天理市の氷室神社などに司祭用に氷室で氷を貯蔵しているところがあるそうで

す。

茶の湯の世界で氷室は菓子の銘としておなじみですね。葛饅頭を山形にしたもの、羊羹や白餡をかち氷に見立てたもの、白い砂糖菓子などがあります。

皆様のお国にも氷室に因むお菓子があるのではないのでしょうか。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~